

夏休みの小中学生に、実験や観察を通じて真理を探究する科学の面白さを知ってもらおうと、仙台市青葉区の東北大の各キャンパスでさまざまな講座が開かれた。

大学の最先端の研究を紹介する「夏休み大学探検2004」（仙台市など共催）は、七月下旬に四回にわたり開催された。同大加齢医学研究所で開かれた講座では、市内の中学生約二十人が医学をテーマに体験活動に取り組んだ。

未知の世界 好奇心が パスポート

子どもたちは、実際に人工心臓に触れて血液循環の仕組みを確かめたほか、電子顕微鏡でマウスの細胞などを観察した。模擬手術を体験した五城中二年近藤里穂さん（三）は「自分の

体の仕組みがよく分かった。将来は小児科の医師になりたい」と笑顔で話した。

同大創造科学センター「発明工房」で開かれた「子ども科学キャンパス」には小学生約百八十人が参加。岩石を材料にしたステンドグラス制作や、コンピュータを使った

「こま製作など六講座で科学の魅力に迫った。

小中学生たちの「理数離れ」が指摘

される中、発明工房の山中将・副センター長は「想像をかたちにしたたり、新しいものを生み出せたりするのが科学の面白さ。自分の発想や体験を大切にしてほしい」とアドバイスしていた。

（写真部・岩野一英、小林一成）



人工心臓を使った実験では子どもたちが実際にポンプを操作。メスシリンダー内に噴き出た水の高さで血圧の強さを確かめた。東北大加齢医学研究所